

環境教育センター第3回講演会（Mカフェ3）報告

『土・農・食を中心にすえた『子どもの生活づくり』—地域と自然をつなぐ保育の場—』

磯部 美良
成富 清美*

(*元・玄海風の子保育園園長)

保育において、子どもと自然のかかわりは、科学性の芽生えと豊かな人間性を育てるうえで、常に大切にされてきたテーマである。飼育栽培や戸外保育に代表される活動は大正時代から保育に取り入れられ、現在でも脈々と実践が続けられている。また平成17年に『食育基本法』が制定されたのにもない、土おこしから畑作り、収穫、調理までのプロセスを子どもに体験させるなど、食育活動に熱心に取り組む園も増加している。20世紀後半、我が国の社会や人々の生活は劇的に変化し、豊かな自然や伝統的な暮らしが失われていくなかで、子どもの学びの基礎ともなる自然体験・生活体験を保育において保障していくことの重要性はますます高まっていると言える。

一方で、「自然体験や食育活動が1回限りのイベントになってしまっている」「外へ散歩に出ても、ただ歩いて戻ってくるだけである」「自然物や廃材を使った表現遊びをするにしても、それらを素材としか扱っていない」という声も聞く。このことは、すでに保育者自身の自然体験・生活体験が豊かなものではなくなっていること、そして、自然とかかわることや地域の生活文化を継承することの意味が見えなくなっていることを示唆している。また、こうした状況を受け、保育者・教員養成教育において、自然に関する科目や環境教育を教えることの必要性が指摘されるようになっていく。

平成22年に新設された本学人間発達学部は、保育士、幼稚園教諭、小学校教諭の養成を主目的とし、子どもの心身、自然環境、地域の3つを学びの柱としている。このなかで、自然環境と地域については、『子どもと自然』『子どもと地域』『食と農業』『農業実習』『環境教育論』『子ども支援

地域活動』といった科目が開設され、学生たちは、自然や農、地域についての学びを日々深めている。しかし、こうした学びをいかにして具体的な保育・教育実践に落とし込んでいくかは、なかなかイメージしづらいものである。とりわけ、地域という言葉は、近年、地域再生、地域の活性化などよく耳にするようになったキーワードであるが、若い世代の学生にとっては、捉えにくい概念となっている。

今回、講演会の講師としてお迎えした『玄海・風の子保育園』の元園長である成富清美先生は、まさに、地域と自然をつなぐ保育を長年にわたって追求されてきた方である。1960年代に保育現場に入った先生は、高度成長期を境に人々の暮らしが激変するなかで、子どもたちの遊びが衰退していくのを目の当たりにされた。子どもの遊び集団から、自然との関わりや縦の関係が失われ、テレビやゲームにとって代わられた。それと同時に、子どもたちから主体性が奪われていった。こうした変化をつぶさに見てきた先生は、「子どもが子どもらしく子ども時代を生きていけるにはどうしたらよいか」を考え、手探りで保育に関わってこられたという。

福岡市におられた頃には、子どもの成長を真ん中にすえて、保護者たちが主体的に協力し合い、共に成長し合う姿をみて、「あ、これなんだ」という手ごたえを感じてこられた。そして、『玄海・風の子保育園』（宗像市）の設立にたずさわる機会を得るに至って、そのつながりの輪をさらに広げ、地域全体の人たちを巻き込んで、子どもの生活環境づくりをしようと決心された。

園の設立に初代園長として関わることになったとき、成富先生がまず始めたのが、地域に住む人

たちとの対話であった。それは、「自分たちの保育園をつくるんだ」という園の保育に主体的に取り組む地域の姿勢を引き出すためであった。というのも、おそらく、子どもたちが本当に主体的になるためには、周りの大人たちも主体的でなければならない、子どもは大人の姿をみて育つのだから、という考えをお持ちだったからだと思う。そこで成富先生は、保育園を核として、地域の人たちが主役になれる場、出番づくりを始める。地域の人たちは、それに共感し、自分の持ち味を生かしながら自分たちの知恵を子どもたちに伝えていくという関係ができてあがっていった。このことが地域の人たちにとっても生きがいとなり、結果として、今言われている地域の活性化にもつながっていった。園の保育士たちも、そうした地域の人たちから様々な知恵やコツを学び、それをカリキュラムとして保育実践に定着させていったという。

これが地域で子どもを育てることの意味であり、そうしたなかで、人から人へと伝えられる生活の知恵、生活文化は、その地域で生まれ育つ子どもたちにとっての誇りと文化的アイデンティティになっていくのではないだろうか。成富先生がされてきたことは、保育園づくりを通して、人々が主体的になれる場をつくっていくこと、先生は、その仕掛け人であったと言える。

あらためて講演録を読み返してみると、成富先生がされてきたことは、地域全体を巻き込んで、子どもの生活環境をつくっていくという、その穏やかな語り口からは想像がつかないほど、壮大なものだったことがわかる。それを成し得たのは、「子どもの成長を真ん中にすえて、大人同士がどれだけ成長し合えるか。そういうつながりを、どれだけつくれるだろうか」という先生の課題意識と行動力があってのことだったと思う。保育者の養成にたずさわる我々は、こうした成富先生のメッセージをしっかりと受け止め、これからの次世代をつくっていく担い手を育てていくことが求められている。

以下に、本学にて開催された成富先生の講演録を掲載するが、校正の責任の一切は磯部にあることを付記しておく。

◎講演

成富 みなさん、こんにちは。私は都城にはいろいろとご縁がありまして、玄海風の子保育園も都城出身の建築家に建物を造っていただいたんですけれども、いつもその人から、何か都城というか宮崎の風が伝わってくるんですよ。建物にゆとりがあるし自然が取り込まれるし、自然が伝わってくるという設計者なんですけど、ここに来て、なるほどこういう風土の中で生まれた感性なんだと感じました。

振り返ってみますと、私は1960年から保育現場に入りまして、こんなに長くなるとは思っていませんでした。私が生まれた頃はまさに戦争中だったということもあって、ちょうど高度成長期にかかってから後の子どもたちと、それ以前に私の目の前にいた小さい子どもたち、まだテレビが普及しない時代の子どものたちの生活の違いと遊びの違いをすごく実感してきました。そういう思いで、何が大事なのかということを考え、いつもそこに戻りたいなという願いを持っていました。

大事なものの中にはまず土があります。私がこの仕事に入ったときは、子どもたちは土で遊んでいて、遊びの種類がものすごく多かった。子どもたちは自分の足で保育園に来て、門を入る時に「きょうはだれだれちゃんと何をして遊ぶ」という目論見がちゃんとあったし、「きのう習ったお兄ちゃんたちの遊びをみんなとしたい」という主体性が子どもたちから伝わってきた時代でした。その時代から、テレビが家庭にも普及し食生活も変わってきた、そういう変わり目の中で、いったい自分の役割は何だろうといつも考えながら保育に関わってきたように思います。

戦争も知っています。震災も知っています。そういう中でその変わり目を、自分は子どもとしてどういうふうに見ていたのかを振り返ると、大人は見られているんだ、子どもから見られているんだよということ、それを自分が体験として意識しないといけないと思うのです。終戦前と終戦後の社会の変わり目を見た者として、自分は日本の憲法に謳われているものを主権者の一人として実現させていかなければいけない役割を担っているんだ、というのをすごく感じています。

じゃあ子どもの世界でそれがどんなふうになるんだろうか。それを私は園内でも毎回お話しします。また児童憲章で、どの子も人として尊ばれるし文化的な環境を保証されなければならないと謳われていますが、その理論にならって、自分の役割をどれだけ保育という現場で果たしていけるのかと考えると、子どもの生活の中でそれを求めていくというのが一つの基本的なテーマだと思い、毎年そこに立ち返ることで課題をもらおうというふうに思っていてやってきました。

とにかくマンネリになったら辞めるんだと決まっていたんですけど、なかなか次々に、こういう何らかの課題を突きつけられると辞める機会を失ってしまいました。ちょっと長すぎましたけど51年間、いろいろ考えながら保育に関わってきました。

その中でも子どもの生活空間、自然との関わりをどうつくっていくかというのがテーマでした。それは、子どもの成長をしっかり大人が守る。子どもの成長を真ん中にすえて、大人同士がどれだけ成長しあえるか。そういうつながりを、どれだけつくれるだろうか。そこを自分のテーマとしてきました。

そういう関係づくり、保育園づくりというのを手探りしながら、いろんな協力の機会をつくってきました。そこでの親たちの主体的な関わりに「あ、これなんだ」という手応えを感じましたし、違う保育園でも親の育ちあう姿を見る機会がありました。親が仲間をつくって何か子どものためにやるのが楽しい。そう思えるような保護者の活動と連携しながら、園づくりをやってきたと思います。

福岡市は130万の都市ですのでどんどん都市化されて、私たちの願いもなかなか、畑をするのにも小さな園庭でしないといけないという環境におかれました。それでも保護者とともに育ちあう、育てあうということ、大人が子どもに学びながら育つことに、私はすごく手応えを感じながら28年間過ごしました。

『玄海・風の子保育園』の設立

ちょうどその時が62歳でしたから、もうこれで辞めないといけないかなと思っていた矢先に、福

岡市と北九州市の間に宗像市というのがあるんですけど、その知り合いから3月に電話があったのです。「玄海町に保育園がつくれるという話があるけど、どうですか」という話で、その瞬間に「はい、私がやります」と決意しました。

そのなかで、私が地域を少しまわってみると、まだ地域性が生きている地域だというのを直感しました。漁業と農業が基幹産業なんですけど、そこで自分の仕事に誇りを持って、厳しい生活も自分たちで乗り越えている人たちに会いました。ここはまだ大人の行動を子どもたちが見る機会がある。地域の人たちがそのことを誇りに思っていることにすごく感動して、ぜひここに保育園をつくりたいと思いました。

そして関わってくれる人たちが、「自分たちの町の自分たちの保育園づくり」と思ってくださいような会をつくりたいと思いました。「保育園をやろう」といってフリーの人をかき集めてスタートしたんですが、はじめに「風の子保育園という名前がいいよね。海があるからね」「じゃあ、風の子保育園にしよう」と決めて、「風の子保育園をつくる会」を立ち上げました。保育園をつくるのが目標ではなくて、地域の人たちがわが町の保育園をつくるんだという思いになってくださるような主体的な会。それをどうしたらつくれるだろうかと考えました。それで町内会長さんや町中のいろんな人に、「私たちはこういう保育園をつくりたいんです。ぜひ一緒に、いろいろ知恵を貸してくださいませんか」とあちこちまわって、地域の人との結びつきをつくってきました。

「風の子保育園をつくる会」では、どういう保育園をつくりたいのか、広さはどれぐらいあったらいいのかという話をし、イメージを出し合いました。建築をしている人たちもちろん、福岡教育大学が近かったので学生さんにも参加していただいてイメージが膨らんでいって、そのイメージをもとに設計をしたんです。「ほんとうにこれでいいの。どんなふうになるか分からんよ」と密かに思いつつも、みんながいいと思ってるからまずはやってみようと思ったわけです。たとえばうちは厨房が真ん中にあります。建物の中心は厨房だということで、厨房が真ん中であって、その名

前も、「やっぱり中心はお日様だよ」ということで「おひさま」となりました。

そういうふうになんかの「自分たちの保育園をつくるんだ」という意識づくりを大切に、いまは玄海町という土壤に保育園を守り育ててくれる人たちの種をまいていく時期だと思って、心をつなぎ知恵を借りながらやってきたことを思い出します。

そんななかで、この町にそれまでなかった保育園が戦後初めてできるというので、「保育園ってかわいそうね」「赤ちゃんから預けるのはかわいそうたい」という世論もまだしっかりありました。「私がみちゃんけん、保育園にやらんでよか」というところもいっぱいありました。スタートしたのが2003年1月でしたが、最初は0歳児は一人も来ませんでした。まあ、よしよしという感じではありましたが。

やっぱりこちらから、何を保育園でやって、何を大事にしているかというのを、いろんな機会に地域のの人に伝えないといけない。では、どんなふうに伝えていったらいいのかと考えました。

「風の子保育園をつくる会」はひとまず役割を終えましたが、せっかくできたたくさんの方のつながりがあります。それを「風の里・夢委員会」に名前を変えて、保育園の5000坪の土地に何を作ってどんな舞台にするのかを今後の課題として再スタートしました。

保育園づくり第一歩のテーマは「食と農と環境をつなぐ」ということで、毎年、まつりをやっています。スタートの時からいねいに、大事にまつりをつくり、第一回目はまだ建物が建設中のときに開催しました。その時は、「やっと棟が上がりました。上棟式をやりたいと思います」と言っていて、町長さんはもちろんのこと議員さんなどいろんな方に案内をして、地域の人が主役になるような準備をしました。

「快晴になればよかろうね」とか、「上棟式にはやっぱり餅つきがあるね。自分の米ば使えばよかばい」と米を提供してくださるし、「餅つきはうちでやろう」と言ってくくださるし、「あまりよか魚じゃないばってん、きのう捕れとったけん」と魚を持ってきてそれを活用させていただいた。農

家の人は芋を持ち寄ってくださった。地域の人が、言われるから来るのではなくて自分からやって来てくれることが大事なんですね。みんなが主役で、町長さんも餅まきをして楽しめるし、いろんな形で期待をされていることがこちらにも伝わってきました。そんなふうにわが町の保育園ができることを楽しみにする気持ちがだんだん高まってくるのを実感しながら、本当にいねいに人との関わりと、そこから生まれてくる可能性の土壤をつくってきたのではないかと思います。

つくってからではなく、つくる時から地域の人たちが参加したということで、その後何が開発されるんだろうか、この人たちの一人ひとりの希望とかがどんなふうに保育園を充実させられるだろうか、地域とのつながりがどんなふうに広がっていくのだろうかと、とても楽しみでした。

そういうなかで実感していたのは、生活がまだちゃんと生きている地域の人たちというのは、こちらが大事にしたいということに共感してくださる力を持っていて、それに返してくださるということ。そこを保育園に関わる力として開園しました。

開園当初は本当に子どもの数が少なかったんですけど、賛同してくださる人たちが、開園後もこの出会いがにつながるために何をしたらいいだろうと主体的に考えてくださったし、自分たちも地域のよさをどんなふうに取り込み、地域の中の保育園としてどうなるべきかということをもっと大切にしてきたように思います。そういうなかで私たちも意欲をつくってもらえたのではないかなと思います。

地域のいいところ探しといって、いろんなところに行っては話しこみました。保育園は建物づくりから始まるように思っている人もいましたけど、実際にやってみると、「保育園づくりってここからだよ」と、地域のよさがびんびんこちらに伝わってくる。地域の悩みももちろん分かってくる。そうしてこちらからは「保育園をこういうふうにご利用すればいいですよ」とメッセージをお出しするという関係が、開園前からつくられていきました。ですから保育園に孫を送ってきたおばあちゃんたちが立ち止まって話をしていくとい

う風景が、なんともうれしいし愛おしいしという思いで開園したことを思い出します。

こういう頼りがいのある地元の方との出会いと触れ合いの中で、子どもたちはもちろん私たち職員がいろいろと支えられています。そして何より、地域の方々が子どもたちの成長をともに喜んでくださり、保育内容への理解と共感も得られた。そのことが保育者集団として、自分たちが言っていることを本当に地域に支えてもらっているという確信につながったのではないかとと思っています。

でもこれはまさにスタートの時ですので、これから何が生み出されるか、保育園に何が根付いてくるのか、どんな花が咲くのかというのは、まさにこれからだと思っていました。そういう意味で、この地域でこそつながりあえる関係は、いま改めて大事だなと思います。

大島の子どもたちと出会って

これまでの過程の中でこんなこともありました。

玄海地域から20分ぐらい船に乗っていくと、大島という人口が800人ぐらいの地域があるんですが、そこにへき地保育所があり、指定管理者制度の募集がありました。もちろん公立なんですけれども。何でも民間委託がいいとは決して思いませんが、それをきっかけに、本当に私たちがここをどう捉えるのか改めて問われていると思いました。向こうからも「ぜひ風の子さんに」というのがありましたけれど、みんなはどう思うのだろうと職員にいろいろと聞いてみました。

じつは大島の中学生が船に乗って、玄海の保育園に職場体験に来るんですね。その子どもたちの「目が違うよね。目の光が違う。何でだろう」「小さい子どもたちの求めていることを察知するのがうまいよね。体がサッと動いて、こちらのしてもらいたいことができる。これってどこで育まれているんだろうね」というのが、職員のすごい関心事だったんですね。それで、たったそれだけで、ぜひ大島の子どもたちとの出会いをつくりたいと思って指定管理者に応募したわけです。そして管理を引き受けるようになって、2010年からこの保育園づくりをしています。

玄海と違ってそこはもう一つ、子どもたちの人数もちろん少ないですけど、地域のつながりがものすごくあります。そしてそこにはまだ生活がしっかり残っている。なんていうんでしょう、いま便利さが追求されてコンビニってどこでもある風景ですが、その島にコンビニはないんですね。夜になると暗くなるので、夕方になれば家族でちゃんと食事ができる。そうせざるを得ないと言えそうですがもしませんけれども。そういうところでも子どもの生活が安定している。そして昔から子どもたちは当たり前のように地域から見守られているという条件があるので、3歳児から一人で登園します。1歳から入園なんですけれども、3歳からは荷物を自分で背負って保育園にやってくる。

地域のつながりでいえば、何か困り事を言うとか保護者だけでなくいろんな所から、消防署からも来られる。排水がうまくいかないと言ったらワッと伝わって、いろんな人たちが来て一緒にやったださるんですね。なんかすごいなあと思いました。

またある時、80代ぐらいのおじいちゃんが、「中学生ぐらいの子が一人、なかなかあいさつをせん子がおるとですよ。私はわざと道に立って毎日その子にあいさつをします。何回かしよったらちょっと顔が上向きになりまして、もうちょっとするとあいさつをしてくれると思います」と言われたんですね。本当に地域の人たちが子どもを宝にしている、子どもを大事に思っていることがそれで分かると、私はすごく感動したんです。そういう地域性に、高齢者も含めて自分の持ち場を自ら作っている姿に、とても感動しました。

運動会も全島の運動会ですから、保育園から高齢者までお互いが主体的に参加して、漁業の幟旗がバーッと立てられて、おばあちゃんたちも張り切っていらっしゃる。決してお客さんではなくて参加者なんですよ。そういう姿に私は本当に惚れこんだというか、そことの関わりのなかで、このよさをいま、日本で取り戻すというか作っていくことを提起されているんじゃないかと思いました。

そういうわけで大島と風の子、同じ地域のよう

だけど違った深さが大島にはあります。2年間ですけれども、関わりを大事にしながら、それをいろんな所に広げられたらいいなと思っています。

ジョージ・バーバの会、スタート

玄海風の子保育園の基礎づくりのなかでも、地域のおじいちゃん、おばあちゃんたちの力を形にしようということで、第一回の運動会の時に私はこういう提起をしました。

この地域でおじいちゃん、おばあちゃんの力をお借りしたい。子どもは大人に見守られながら大人のいろんな日常的生活を見よう見まねして育っていくことが非常に大事です。おじいちゃん、おばあちゃんはお父さんお母さんを育てる過程でいろんな知恵をもってらっしゃるし、地域の伝統的な食文化も守ってらっしゃる。その知恵を直接孫世代に伝えてもらいたい。私は福岡でも、子どもの成長を真ん中にすえて、お父さん、お母さんのつながりをずっと求めてきましたが、そのもう一つ大きい輪をぜひここでつくってほしい。

そしたら来てくださっていたおじいちゃん、おばあちゃんたちからものすごい反応がありました。「よう言うてもらった。自分たちの出番をつくってくださるとは、こんなうれしいことはない」といって、退職間際のおじいちゃんが、「まず自分たちのたまり場を作らにゃいかん」とプレハブを一つ作ってくださって、いまもそこがたまり場になっています。

また、「いやあ、もう孫がかわいいてかわいいてならんから、ほんとに保育園に来たいし、孫を保育園に來らせたくないという思いがあるけれども、こういう出番をつくってもらえるんやったら、嫁に気兼ねせんで保育園に來れるけん、ほんとにうれしか」って言うてくださる方もいました。

こうして、いろんな職業を体験した方の知恵をもらえるということで、ジョージ・バーバの会をスタートしました。自分たちの持ち味を生かしながら、自分たちの仕事を自分たちで作ってくださるんです。地域の食材を生かした昼ご飯を月に一回作ってくださったり、まつりや行事でテントが要るからと、いろいろ作って露天販売して子どもたちにテントを贈ってくださったり、卒園式には、

学校でもしっかり掃除をするようにと雑巾を作ってくださいたり。子どもたちがコマ回しをしていると、お母さんたちは素通りして行くのに、おじいちゃんは「どれ、貸してんみゃい」と言っパツと回してみせる。そういうふうに分ちたちの知恵を子どもたちに伝えてもらえることがとてもうれしいですし、子どもがそれを見つめる真剣な目も、また素敵です。この出会いが子どもたちを守ってくださる力になるし、おじいちゃん、おばあちゃんたちの生きがいにもつながっていくということで、いまもそれをやっています。

職員も少しずつ、地域の人たちから学んだことを保育の実践に生かしながら、食のことをいろいろとやっているところです。

地域でできた大豆と麦を使った味噌作りの指導にも来てもらっているんですが、できた味噌で一年間、毎月みそ汁作りをしています。そこである保育士が考えました。みそ汁に入れる食材を、自分たちの畑でできたものか地域の店に買いに行ってそろえたものにしよう。そうやって食材もいろいろ考えながら毎月作って、3月の末にはお世話になったおじいちゃん、おばあちゃんたちを年長のかぼちゃ組でやる“かぼちゃレストラン”に招待します。自分たちでおにぎりを作ったりするんですけれども。そういうふうに分ち士も少しずつ自分たちのものにできてきているのかなと思ひながら、そういう実践を見えています。これからどういふふうに分びていくのか、楽しみにしているところです。

遠藤（司会者） ありがとうございます。地域というテーマでいろいろな活動内容をご紹介いただきました。感想を述べますと、地域といいますけれど、結局は人と人がちゃんと向かい合う、そういう環境を先生は一生懸命つくってこられたという印象を持ちました。

これから先は、本学の磯部ともう少し深く話しこんでいきたいと思ひます。

磯部 南九州大学人間発達学部で教員をしております磯部です。実は、私が玄海風の子保育園に興味を持つきっかけになったのが、最後にお話しされた味噌汁の実践なんです。食育ということで、

子どもたちに料理を作らせて食べさせてということをするんだけど、普通はいつまでたっても先生が教えないと作れない。けれども、この玄海風の子保育園では、毎月毎月子どもたちが具材だけを変えて味噌汁を作るから、どんどん味噌汁作りのプロに、職人になっていく、指導が要らなくなるというのを聞き、とても驚きました。それがまずこの保育園に興味を持ったきっかけでした。そういう取り組みが生まれたのは、保育士さんが自分でどういう実践をしようかと主体的に考えるようになってきたから。地域の人々から保育士も学んで、だんだん地域が園の中に取り込まれるようになったからだということを今日のお話で知りました。

先生が玄海風の子保育園をつくろうと考えたときに、もちろん子どもや先生は当然のこと、地域の人々も含めてみんなが自分の保育園だと思えるようにしたいというお話でしたが、その辺のことをもう少し詳しくお聞かせ願えたらなと思います。

成富 保育園というのは、戦後児童福祉法が制定された後につくられたんですけども、やはり自分たちの願いを届けていかないとなかなか実現しない時代もありました。婦人が社会参加するようになって、国の制度として保育園の設置が求められてきたと思いますが、その保育園という場をどんなふうに捉えていくかと考えたときに、私は「保育をしてあげます」ではないと思いました。本当に乳幼児期の子どもの24時間を家庭と園で、縦集団と横集団の教育力を生かしていけるようなものにしていくのが基本じゃないかと。もちろん基礎としては保育の専門家なんですけれども、親としての見守りを基本にしながら、子育てを通して自分に求められていることを学び直すチャンスを与えられているということと、次の世代をつくっていく担い手だという誇りをもって、役割認識も含めて子育てを支えたい、共有したいという思いがすごくありました。

ですから、とにかく共に学ぶということをすごく大事にしていった。その目線としてはいつも子どもと同じ位置に立って、子どもに学ぶということ。大人の在りようを子どもが見ている、感じて

いるということを自覚しないといけないということ。楽しみもそうですけど、いろんなものを作り出すことでもお父さん、お母さんが知恵を出す参加型で保育園の保護者活動もやってきました。いま何がほしいのか何が子どもにとって大事なのかというのを勉強しながら、「困ったことを解決するのは大人の仕事だよな」と言いながらつくってきたように思います。

子どもに学ぶということと、子どもから大人は見られている、何を子どもに見せているのかということを私は改めて感じます。そういう中で育った子どもは、「子育てって親たちは楽しそうにやってたよね。私も早く子どもができて子育てしたいな」と言います。久しぶりに来た卒園児がそう言ったので、「えっ、これって成功？」と思いましたね。そういうふうに子どもは感じ取っていくんだと思いました。

一方、親には、大変なときには辛さを自分だけで抱えないで「ねえねえ、聞いて」とか、0歳児を抱えている親にも、「いまが一番大変やけん。もうちょっとよ。がんばってね」と声をかけました。「そんなふうに言ってくれたことが、とても支えになりました」と、卒園の時に話してくれたお母さんがいて、その子どもはいま医療機関で働いています。

やっぱり社会基盤である家庭を視野にきちんと位置付けながら、次の世代の子どもたちにどういうふうに育ってほしいのかというのを一緒にやっていく。そういう関係を大事にしてきたかなと思います。

かつて、大人は黒子だった

磯部 今の先生のお話のなかで、大人のあり方というか、大人の役割ということが出てきましたが、先生の育ちのなかで、大人ってどういうものかというところが実践に生かされているのではないかなと思うんですが、その辺のお話をお聞かせいただけますか。

成富 その話はずーっと遡ります。私は佐賀の鳥栖という田舎で育ったんですけど、第二次大戦の真っ最中が幼児期で、5歳の時に終戦を迎えました。本当に何も文明的なものがない時代ですね。

でもその地域はまだ人の結びつきがあったし、生活文化がしっかりあった。家族のつながりも深かった。いま振り返ると子どもたちが群れて遊べる時間がありました。

いま遊びの時間が短いですね。“遊びこける”という時間が子どもたちに保障されていないから、子どもたちが子ども時代を本当にたっぷりと楽しめていない。かつてはそこで刷り込む知恵とかいろいろあったんじゃないかなと思っています。子どもたちは大人の一生懸命がんばっている姿もしっかり記憶しているし。

たとえば秋の彼岸花をバーッと抱えこんで、午前中はそれで家を作る。茎を編んでいってひもを横に張って花をずっと掛けていくんですね。それを2段にするためにまた工夫してやる。それが結構、幼児ではそれなりの時間がかかるので、あちこちの友だちをかき集めてやる。そしてカボチャの葉っぱで銀砂づくりをやって、午後からはそれでままごと遊びが始まる。そういうふう遊びの準備にもすごい手間をかけていた。でもそれって大人が黒子になって子どもの出番を大事にしていたというか、そういう子どもの時間が保証されてたし、自然と関わる遊びもできていたということ。そこで自活する力が養われてきたんじゃないかなと思います。

そこまでの取り戻しはできなくても、やはり基本は大事だという思いがあって、自分が保育者になってからも、これを子どもたちに保証し伝えていこうと思いました。でもちょうど高度成長期を境にテレビとかメディア文明がどんどん生活を侵してきた時代に差し掛かって、子どもの遊びが衰退していきました。子どもたちが子どもらしく子ども時代を生きていけるような場を、私は親としてももう一回取り戻していかなくてはいけないという思いがありました。

70年代はそういう遊びこけた親たちでしたから、「やろう」と言ったらやる。キャンプ場をつくらうと言ったら、そこらじゅうの木を切ってトントントンとやるんですね。いろんな職種がありますので、大工さんがリーダーで「棟梁！」と言いながら、大学病院の先生でメスしか持ったことのない人が「はい」と言って。職種を超えてつな

がりあう親同士が子どもの遊びを楽しそうに作っていくんですね。それが60歳を超えても継続されているんですけど、私はそれが自分の求めている保育の原点なんじゃないかと思っています。

磯部 大人は黒子ですか。

成富 はい。大人が出しゃばってなかったというか、いま考えると大人が上手に仕組んでたんじゃないかと思うぐらい子どもが中心の行事がいっぱいあって、縦の関係でしたからお兄ちゃん、お姉ちゃんたちがみんなを連れていった。子どもたちは自分でやったつもりになってたんだけど、大人になって「あれは絶対子どもだけでやれたんじゃないよね」と感じました。なんかその頃の大人って多分に忙しかったというのもあったと思うんですけど、表には出ないで子どもを前に出しながら、仕組みを上手につくって、サポートというかそういうのをやってました。そして「そうね、そうね」といかにも子どもが自分でやったように、知らんぷりするというか、さりげなく受け止める。その雰囲気って大人の在りようとしてとても大事なことかなと。いまはあまりにも大人が直接的に関わりすぎているところもあるんじゃないか。だから子どもはじっとして待ってたりすることもあるんじゃないか。子どもは、ほんとに力を持っているよ。そういうふうになっています。

磯部 子どもの力をもっと信頼するということですね。

成富 はい。だってあんなことが子ども時代、子ども同士でやれてたんだよってということがいっぱいあるように思いますので。

幼児期に大切にすべきもの

磯部 先生は50年、保育に携わってこられて、子どもを取り巻く環境、地域が変わってきているし、だけど子どもそのものは変わらないんだろう、環境が変わったから子どもの育ちも変わってきていると。そこをつぶさに見てこられて、幼児期に何を大事にするべきだと思われるのか、またそのなかでの地域の重要性とはどういうものか教えていただけたらと思います。

成富 たとえば「お手玉ができますか」と聞くと意外と、若い方が「うーん」という人が多いし、「毬

つきは？」と言っても同じで、私なんかだれでもできると思ってたんだけどできないんですね。コマ回しもできないっていうので、やはりどこかで断ち切られているんだと思うんです。幼児期に何を見せているのか。何を子どもたちに体験させているのか。五感で感じさせているのかなと。私は、人間だからやっぱり土とか自然とともに成長していくことが基盤にならないといけないと感じて、そこをテーマにしています。

幼児期はもちろん大人の保護がいるけれども、お兄ちゃん、お姉ちゃんが小さい子を引き連れて遊びに行く時代があって、いつも下の子はみそっかすというかアブラムシといって邪魔にされた悔しい記憶もあるんですけどもね。かつてはそういう縦の関係や遊び集団が保証されていたけど、いまは生活の中にそういう時間がほとんどない。失われている。それは意図的につくらざるを得ないけれど、それをほんとうに日常としていくにはどうしたらいいんだろうというのが、私自身のこれからの課題だと思っています。そのなかで保育園は学童との交流とか、そういう縦の関係を追求することにより新たに何か生み出すことができるんじゃないか。風の子保育園の次の夢は、学童の子どもたちと、障害を抱えているけれどもやはり人との関わりを大事にしたいお母さんたちとで、子どもたちのたまり場をつくれたらいいなと思っています。

再生するということが大人の仕事として大事じゃないか。そういう人たちとの関係もそうですし、子どもの生活、時間、遊び、縦の関係でも遊べるとか、そういうことを仕組む、つくっていくことが大人の仕事だと思います。子どもはほんとうに鋭く見抜く力を持っている。大人よりも鋭いと思います。それが記憶に残るので、何を体のなかにしっかり残してあげるのか。心のなかに残してあげるのか。それが大人の課題じゃないかと思っています。

磯部 私が成富先生に惹かれるというかとても憧れる理由の一つに常に課題意識を持ってらっしゃること、私はこれからこういうことをしたいとか、それをいつもおっしゃって問い掛けられる。今も少し出しましたが、先生のこれからの課題を教え

ていただけますか。

成富 それをいうのはおこがましいんですが、つい年齢を忘れるところがありまして、思わずやってしまっ、あっと思うことがあります。ここまでは小さい子どもたちとの出会いがありましたので、今度は自分の生活空間のなかで何かそういうつながりを得られるようなことができればいいなと思いますし、風の子保育園もちょっと遠巻きに取り組みの成長を見届けたいという願いも持っています。やっぱり孤立化しているお年寄りの生活体験を引っ張り出すというか、お年寄り支援してあげる対象ではなくて、今までの生活の知恵をいっぱい抱えた達人なんだと頭を切り替えて、お年寄りにそういう活躍ができる場を提供できればいいなと思っています。

学生へのメッセージ

磯部 ありがとうございます。最後に、うちの大学にも保育者を目指している学生が何人もいますので、その保育者のたまごたちに何かメッセージをいただけたらと思います。

成富 私が保育園に入った当時は、まだまだ小学校の教育をただ下ろしたような保育内容でした。そこに飛び込んで疑問だったのが、幼児期だからこそ一人ひとりが持っている可能性がある、その可能性を見つけてあげるのが大人の役割じゃないかなと思ってました。この子のいいところはどこにあるんだとか、自分がそういう発見器になりたいなと思っていました。それを子どもに伝えたいと。

自分一人ではできないけれども、いろんな人とつながって、親たちでも職員でもいい、足りないところはいろんな人の知恵を借りて、子ども一人ひとりのいいところを大事に見つけていく。子どもが「あ、自分ってここがいいところなんだ。ここが好きなんだ」と思えるように、しっかり育んでいくような保育をしてほしいという願いを持っています。

磯部 ありがとうございます。

<質疑応答>

質問者 1 50年前のかつては自然であったものが

失われている。しかしそれは大切なので、意図的につくっていくとおっしゃいました。でもいつまでもその意図性が前面に出ると不自然だと思うので、いかに日常的なものにしていくのか。その例があればご紹介ください。

成富 「ご飯づくりをしよう」ということで、最初はおばあちゃんたちにしてもらっていたのが、だんだん若いお母さんたちも入ってきて、いまでは当たり前に分たちの役割として保育士やお母さんたちがそれをしています。

たとえば漬物を作るときに、最初は干し方にしても漬け方にしてもおばあちゃんたちが「もう水が上がってるよ。そんなしよったらいかんよ」と時々見に来てくださってた時期から、保育士がそういうことを自分たちのものにしていくと、子どもたちも「水が上がると」と発見してくれるようになるんですね。保育士や若いお父さん、お母さんに知恵が伝わって、自分のものとして暮らしていけるようになっていく。こういうふうに、何かをやって重ねあって刷り込んでいく時期が、風の子保育園には生まれていると感じます。

伝えていく世代とそれを受ける世代がずっと重なっていく。そういう世代間のつながりが大事だということですね。かつて家庭の中で当たり前にあったものがいまは途切れているので、保育園の職員みずから「子どもの頃はこうだったよ」と教わる時間を大事に積み重ねていこうと思っています。そのなかで保育者自身の物事に対する姿、とくに食文化については変化が見えてきたと実感しています。

つながって伝えていくということを意識的に取り組んでいくことが、仕組みの中で大事なんじゃないか。それがさりげなくやれてきたのは、やっぱり地域のおばあちゃんたちの教え方にあります。私は大好きなんですけど、塩を何グラムとかじゃなくて、いわゆる塩梅とか仕草を学べるんですね。そういう知識を継承する場として園はすごくいいのではないかと思います。それが家庭の中でできるといいんです。

この地域はおじいちゃん、おばあちゃんと同居している家庭が比較的多くて、そこではやっぱり違うなとは感じますが、本当に大事な伝統的なこ

とについては、まだまだ意識的にはされていないのかなと思います。それをもう少し客観的に、子どもにとってなぜ重要なのかとか、地域の伝統文化がなぜいいのかということのを頭で理解し、取り戻していかないと、定着ということになりにくいのではないかと思いますね。

質問者1 園の部屋に梅干が置いてありますね。あれは珍しいと思うのですが。

成富 園にも梅の木がありますが、足りない分は地域の方に分けてもらっています。どの時期に干すのかということすら本当に分からなくて、最初は手を取り足を取りという形で教わりましたが、何年か重ねていくと保育士がそのコツを記憶します。それがカリキュラムとして落とされていって、毎年やって定着してきて、新しい保護者が来たらそれをまた伝えていくようになる。自然のもので、自分たちで作って味わうと一味違うと思うんですね。子どもたちも、「そこに生ってた」「ぼくたちがちぎった」というように直接関わっていると気持ちも違うし、きっと味も違う。

漬物を作るとき、80代のおばあちゃんが黙ってそばにいて、子どもたちが塩をふるところを見て、塩が足りないなと思ったら何も言わないでパッパッとさりげなく足してくださる。すると子どもの視線がフッとそっちに向いて、じっと見ていますよね。見せるって、視線が向くってとっても大事です。いまそんな時間が子どもたちの生活にどれだけあるだろう。それが感動の場面として記憶に残っています。お年寄りがいままで培ってきたものを、言葉ではなく体で教えていく。気持ちで教えていく。子どももそれを感じ取っている場面でした。

司会者 いま意図的という話が出てきましたけれど、成富先生の幼少時代のお話をお聞きますと、じつは昔の大人も意図的にやっていたのではないと思われる節がある。そういう大人がいなくなったことがじつは問題ではないか。そういうふう感じられました。

質問者2 私は志布志から来ました。もうすぐ3歳になる娘がいます。まず「保育園に入れるのはかわいそう」というイメージについて。私も小さい時は保育園でした。小学校に上がった時に同級

生のほとんどは幼稚園出身で保育園はごく一部、やはり「かわいそうだ」とぼくらは言われました。成富先生の、いまの保育園と幼稚園のイメージを教えてください。

2つ目は、個人的な質問ですが、保育園、幼稚園に3歳から入れるのがいいか、4歳から入れるのがいいか、どちらがいいでしょうか。

成富 保育園は厚労省で幼稚園は文科省、児童福祉法と学校教育法の違いというのがあります。歴史的には「保育園は貧困層の人たちが行くんだよ」という形でスタートしたので、1960年、私がこの仕事についた頃は子どもたちでも「お金のないうちの子どもが行くちゃんねー」と言っていました。その歴史的なイメージが、保育園と幼稚園を選択するときの基準としておじいちゃん、おばあちゃんたちに「かわいそう」という思いを抱かせるのと、家庭保育が基本だったので「赤ちゃんから保育園なんて」というのがあったと思いますが、それは地域力があったからですね。

でもいまはそういう状況が変わってきていて、保育園は「子どもの発達を保障する」という社会的・教育的な役割をすごく追求してきているし構築してきています。もちろんどこまでも幼稚園と同じということではないのですが、制度的には0歳児も、昔は9人に1人だったのが今は3人に1人の保育士が配置されるとか、条件的にいくら教育の立場にたって考慮しているところもあります。ただし園によって環境や保育についての考え方には違いがあるので、保護者の方に何か教育観的な基準があれば、遠くてもこっちの園を選ぶという選択をされている現状はあると思います。

2つ目の質問ですが、3歳というのは、大人の価値観がきちんと人格に入っていく時期、「ぼくはだいたいこういう人間だな」と捉えていく時期です。そこまでいく前に、子どもが自分を発見して自分をつくっていくときに、仲間にあふれるとか遊びがたくさんあるという子どもの時間が保障されるためには、4歳か3歳かという、ぜひ3歳からだと思います。やっぱり結果として自分をつくってほしいし、楽しみを友達と共感する時間をぜひ保証してもらいたい。地域にそれがないからこそ保育園が、いまは働くために預ける場という

だけでなく、子どもが育ちあう場なんだということですね。

子どもが子ども時代をしっかりと、思い出としても発達のにもよかったというのを保証するという意味では、3歳ではもったいないなあとも思います。条件があうならば本当は0歳からですね。集団の関わりの中で自分を育てていくということでは、昔は地域で保証されていたことを保育園で体験させる。それが必要になっていると思います。

保育園が違った形で保証していけるということでは、新しく制度を生み出すというか。いま制度が変わろうとしていますので、少しプラスアルファのことを言うと、そういう制度が変わろうとすることにストップをかける時間も必要ですが、本来どうしたらいいのかということ新たに、自分たちで生み出すチャンスでもあるんじゃないかとも思うわけです。保護者の立場としてはなかなか難しいでしょうけれども、そういうスタートの時期に来ているんじゃないかなと思っています。

質問者3 ジージ・バーバの会が非常に機能していて、縦の生活の大事さを教えていただいたんですけど、ジージ・バーバの会と一緒に体験する何が大事なんだろう。五感で体験するとおっしゃいましたが、具体的にはどんなことをやっているのか、どれぐらいの頻度でされているのか教えてください。

それとジージ・バーバの会以外の活動で、よその保育園とここが違う、こういうことを考えていていたんだということがあれば教えてください。

成富 ジージ・バーバの会は月に1回の定例会を基本的にしていて、1年間の計画を立てています。そのほかにクラスの保護者から子どもと一緒にやりたいということで日常の活動に関わることを手伝ってもらうこともあります。とくに食文化ではその力が大きいです。それと園庭作業で草を刈ることはおじいちゃんの出番です。まつりにも出店がありますし、例会以外に「風の里・夢委員会」の組織にもジージ・バーバの代表として参加しています。結構、存在感のある会だと思います。

子どもとの関わりでは年中さんとの関係が一番

多いんですが、とくに小学校に行く前ですので、子どもたちとジージ・バーバとの関係をしっかりとつって刷り込んでおきたいという意図があります。「あの山に登りたい」といえば、会のなかで山登りのできるおじいちゃんが一人ついていて、おばあちゃんたちが昼ごはんを作って待っていてくれるというような、例会以外での関わりも多いです。

次の質問ですが、やはり子どもが主人公になれるような保育を心がけているということが答えですが。

質問者3 たとえば普段から自然を体験させる、外で遊ぶ時間が長いのかなと思ったんですが。

成富 それは絶対的にそうです。でもまだ私からすると、もう少しこんな木がほしいとかありますけど。でも絶対的に、外に行く時間は多いと思います。建物の構造でもそうですけれども、部屋は、小さい子には基本的に食事して寝る所ではあるんですが、大きい子は部屋にいる時間がよその保育園より短いんじゃないかと思います。

よその方が来られて、「子どもの目の光が違うね」と言われるのと、福岡市から来た人が「足腰が強いね」と言われたのは、やはり動きまわる時間が保証できる空間が子どもの力になっているのかなと。子どもたちは小学校に行ってから、いろんなものを発見するということを、先生からよく言われます。それも、いろんな生き物が園の敷地のなかに棲息しているのを、子どもたちは保育園で生活するなかでそれぞれに発見しているからなんだろうと思います。

司会者 どうもありがとうございました。今回のM-cafeは、地域をテーマとして進んできました。地域というと捉えにくいと思うのですが、今日のお話を聞くと、地域にいる人と子どもたちの関わりが大事であって、子どもたち一人ひとりを見て意図的にいろんなことを、それも気付かれないようにできる大人というのが地域には残っている。そのことが地域のなかで子どもを育てる意味じゃないか。個人的な感想かもしれませんが、そんなふうに感じました。今日はどうもありがとうございました。

日時：2012年2月25日(土) 13:30~15:30

場所：南九州大学 都城キャンパス 学生交流会館

講師：成富清美（元・玄海風の子保育園園長）

聞き手：磯部美良（南九州大学人間発達学部・講師）

司会：遠藤晃（南九州大学人間発達学部・准教授）